

眠らない姫と 珍しい鈴



mikatuki98

ある国のお城に、眠たいのに眠らない姫がいました。

お姫さまが眠らなくなって今日は3日目です。

「お姫さま、人間、夜は眠ることになっておりますよ」

毎夜、お姫さまの耳元に囁かれる執事の言葉も、今夜で三度目です。

「はいはい、わかっております」

お姫さまは今夜もそう言いながらベッドの上でうなづくのですが、結局、夜が明けるまで眠ることはありませんでした。

もちろん朝になっても、昼になっても、眠たそうな顔をしているのに眠りません。

ただ夜と違っていたのは、ベッドから起きて椅子に腰掛け、ほとんどの時間を部屋の窓から庭の景色を眺めて過ごしていたことでした。

そんな様子に心配でたまらない執事は、7日目のお昼、お姫様に訊ねました。

「お姫さま、一体いつお眠りになれるのですか？」

眠らないでお姫さまのお世話をしているので、正直なところ執事もいい加減眠くて仕方がないのです。

するとお姫さまは目を閉じて見せますが、すぐに薄目を開けて執事の様子を伺っています。

途方にくれた執事は、しばし考え込みました。

そして何かを思いついたのか、お姫さまの部屋を慌てて出て行くと、手に鈴を持って来ました。

「お・ひ・め・さ・ま」

執事は少し悪戯っぽい笑みを浮かべると、窓辺の椅子に座っているお姫さまに鈴を差出しました。

「お姫さま、わたくしに御用の節は、この鈴をこのように振って鳴らしてくださいませ」

執事がお姫さまの前で鈴を振って見せると、75個も付いている小さな鈴がシャランシャラン♪とお姫さまが今まで聞いたことのないような不思議な音を立てました。

「まあ、珍しい鈴」

お姫さまは自分でも鈴を手にとって振ってみました。 シャランシャラン♪ シャランシャラン♪

「お姫さま、よろしいですか？ わたくしに御用がおありの時だけ！ 鈴を振ってくださいませ」

「はいはい、わかっております」

「わたくしは隣の部屋に控えております」

「はいはい、わかっております」

「では、御用の節は鈴を……」

執事は隣の部屋に控えていると言いながら、実は仮眠を取ることにしたのでした。

その夜、相変わらず眠らないお姫さまは、静寂の中、鈴の音を聴いてみたくなりました。

でも、この鈴を振ると執事がやって来ます。

執事に特別用事がある訳ではないので振ることは出来ません。

それでもお姫さまの手は既に鈴を握っていました。

「一度だけならよいであろう……」

お姫さまはそうつぶやくと、おもいきり鈴を振りました。

シャラ〜〜〜ン♪

なんとも心地良い音です。

「もう一度だけ……」

シャラ〜〜〜ン♪

「もう一度だけ……」

シャラ〜〜〜ン♪ シャラ〜〜〜ン♪ シャラ〜〜〜ン♪

お姫さまは気が付くと3回も鈴の音を鳴らしていました。

ところが隣の部屋から現れるはずの執事の姿が見えません。

「昼間は一度鳴らしただけで直ぐに来てくれたのに……」

さすがに心配になったお姫さまは、何度も何度も鈴を振っては音を鳴らしますが、いっこうに執事が現れる気配はありません。

お姫さまは取り付かれたようにベッドの上で鈴を振り続けました。

すると勢い余って、鈴がお姫さまの手からすり抜けてしまいました。

「あ！ 鈴が……」

鈴はクルクルと宙を舞い天井に突きあたると、75個の小さな鈴が一気に砕け散りました。

お姫さま慌ててベッドから跳ね起きると、床に散らばった鈴を集めようとします。

けれども鈴を拾おうとすると鈴は生き物のように音を鳴らしながら逃げて行きます。

「あ！ 待って、待って！ 待って、待って！」

追いかければ追いかけるほど、75個の鈴がいつせいに逃げるように転がっては音を鳴らします。

お姫さまも何かにとりつかれたように鈴を追いかけて続けます。

そして遂に目を回したお姫さまはヨロヨロと床に倒れ込んでしまいました。

するとその音にやっと執事が気が付いたのか、お姫さまの部屋に駆け込んで来ました。

「お姫さま！ どうなされました！？ 大丈夫ですか！？」

執事はお姫さまを抱きかかえ、ベッドに身体を横たえます。

「お姫さま！ しっかりなさってください！」

すると意識を取り戻したお姫さまが言いました。

「わらわは…… 眠ります……」

それからお姫さまは何日も何日も眠り続け、結局74日間眠り続けました。

そして75日目の朝、ベッドの上からお姫さまの姿が消えてしまっていました。

お姫さまの居なくなったベッドの上には、いつの間にか75個の鈴が円を描いて並んでいます。

お城の者たちはもちろん、奇怪な出来事を理解できません。

その代わりに、お姫さまは鈴の妖精になられたのだと噂するようになりました。

お姫さまが居なくなって7日目。

執事がお姫さまの部屋の窓から庭を眺めながら、密かにつぶやきました。

「お姫さま…… 仕方がなかったのです。 わたくしにはコレしか方法は見つからなかったのです」

翌日、執事はお姫さまのベッドの上に残っていた75個の鈴を集め、再びひとつの振る鈴の形にすると、それを持ってお城の仕事を辞退して旅に出ました。

しかし執事の足跡は誰にもわかりませんでした。

ただ、執事が通った道には何処からともなく、鈴の音が今も聞こえてくるそうです。 了